

## 学校建築計画を牽引する設計事務所に聞く 株式会社 総企画設計

話し手：澤本 清史氏 株式会社 総企画設計 取締役副社長  
聞き手：柳澤 昌俊氏 一般社団法人 文教施設協会 専務理事



澤本清史氏

### 総企画設計について

柳澤 「季刊文教施設」では本号から新企画として「学校建築計画を牽引する設計事務所に聞く」というインタビュー記事をシリーズで掲載していくことになりました。その第一弾として、学校建築の設計で目覚ましく実績を伸ばしていらっしゃる株式会社総企画設計に色々とお話を伺いたいと思います。よろしくお願ひ致します。

最初に会社についてご紹介いただけますか。

澤本 総企画設計は創業が1991年ですから、誕生からまだ32年の若い会社です。設計事務所としては後発で、同業大手各社に比べれば歴史も浅く発展途上の会社だと思っています。現在の所員数は330名程で今年度の売上は50億円を超えました。日経アーキテクチュアの2022年度売上高ランキングでは25位でした。

柳澤 失礼な言い方ですが、それだけノビシロを持っていらっしゃるということだと思います。関連して設計事務所としての特徴などについてお話をください。

澤本 弊社は受注の9割が官庁からのものです。官公庁業務で日経アーキテクチュアのランキング7位



(左) 柳澤昌俊氏 (右) 澤本清史氏

でした。そしてその中でも最も多いのが学校施設で、仕事全体の7割近くを占めています。日経アーキテクチュアではお陰様で教育施設部門の売上で初めて1位にランクされました。

また、弊社は大きな新築物件の設計ばかりではなく、小さな改修物件、例えば小中学校のトイレ改修などのリニューアル物件も多く手掛けているのも特徴と言えます。日経アーキテクチュアではリニューアル業務で3位でした。

### 設計理念は「人との調和」

柳澤 設計という作業について伺います。日常的に設計に携わっていらっしゃる中で、設計という作業をどのように捉えていらっしゃるのか伺います。

澤本 会社の設計理念は「人との調和」です。これはどういうことかと言うと、建物は使われて初めて生きる存在であって、そこにはユーザーやクライアントなど沢山の方が関わってくるわけです。そういう方々とよく議論を交わし、お互いに共通理解を持ってちゃんと使ってもらえ愛される建物をつくることを理念にしていて、これを「人との調和」と言っています。

### 学校施設の設計について

柳澤 次の質問に移らせていただきます。学校施設を設計する上で様々な今日的な課題あると思います。例えば、新しい教育への対応、SDGs、ZEB、ウェルビーイング、防災機能、バリアフリー、ICT、或いは施設だけの話ではないかも知れませんがいじめとか不登校、働く教職員の職場環境など様々な課題がある訳ですが、そういった課題に対して設計の上でどのように

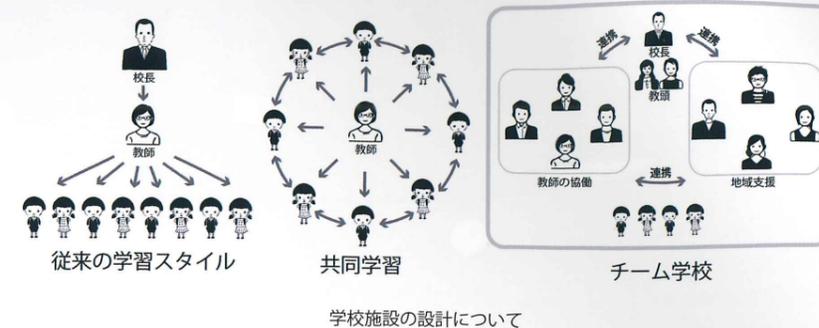
取り組んでいらっしゃるかお聞かせください。

澤本 今は本当に変化の時代だと思います。IT化でビジネスの世界も変わっていていますし、環境問題も人類共通の課題です。時代の変化に伴って求められる人材も変わってきていると思うんですね。そうすると、人材を育てる教育も変わって、昔のような黒板に向かう一斉学習の時代は終わり、学校で学ぶ内容も学び方も変わってきている。設計に携わる者は、学びの内容や学び方に応じた学習の場所の在り方を模索しながら設計しなくてはならないと思います。

これからの時代の学校は、一斉一律の授業スタイルの限界から抜け出し、子供たち同士の「共同」による学習、教師の「協働」による指導が求められています。それと子供の数が少なくなっている時代では社会全体で子供を育てるという意識や地域と一緒に「共同」で育てるということが必要になっていると思います。

ですから校舎も、色々な共同活動がしやすい場所に変わらなければいけない。共同の場、最近はコモンズという言葉を使いますが、これからはコモンズを中心にした学校が増えていったらいいなと思っています。

です。これから校舎も、色々な共同活動がしやすい場所に変わらなければいけない。共同の場、最近はコモンズという言葉を使いますが、これからはコモンズを中心にした学校が増えていったらいいなと思っています。



### 設計事例の紹介 一串本小学校

柳澤 それでは、今お話しいただいたような考えに基づいた設計事例を紹介していただけますか。

澤本 まだ設計途中ですが、本州最南端の和歌山県串本町で小学校の設計を進めています。東南海地震想定で串本町は非常に大きな津波被害が予想されています。それで今海沿いにある学校を高台に移転統合して新しい小学校をつくらうとしています。

私たちはプロポーザルで「繋がる学校」を提案しました。それは先程お話しした子供たち同士が繋がるとか先生と子供たちが繋がるといったこともありますが、高台に新たに街づくりをスタートする起点になる学校なので地域と繋がる、街の中心になるような学校を提案しました。



一緒に学ぶチームコモンズ (串本小学校)



学びの中心となるラーニングcommons（串本小学校）

それが文部科学省の先導的モデル事業の一つに選ばれ、文科省の補助もいただいて、この3月に1年かけて作成した報告書を提出しました。

この過程で、学校づくりの検討組織の一角に設計者として陪席させていただき、皆さんの議論を踏まえながら1年かけて基本設計を固めていくという作業をしました。その中でつくづく思ったのは、新しい学校を作る時に、学校に対する今までの固定観念、つまり校舎というのは北側に廊下があって南に教室が並んでいるという固定観念を破ることがどんなに大変かということがよくわかりました。皆さん誰もが学校で学んだ経験を持っていて、それぞれ自分の経験をベースに考えていると、なかなか新しい学校づくりはできないですね。今作りたのは過去の学校ではなく未来に向かって使う学校ですから、やはり皆が集まって議論して自分たちの固定観念を壊すところからスタートすることが必要です。新校舎の建設が学校を考える良いきっかけになることもよくわかりました。

この学校は先ほど申し上げたcommons（共同の場）を中心に構成されていて、例えば教室の塊は1教室ずつが独立しているのではなく、学年の学習の共同の場であり、職員室も机だけが並んでいるのではなく、先生たちが協働で作業できる教師のcommonsです。それから特別教室も従来は使わないときは鍵がかかってしんとしているイメージがありますが、これは実にも

つたいないと思います。そうではなく関連する教科、例えば図工と理科が一体になってモノをつくる場とするよと思います。串本小では特別教室群をSTEAM（STEAM）commonsと位置付けて、STEAM教育を実践する場として設計を進めています。これを弊社の代表作の1つにしたいと思っています。

### 学校関係者の議論が大切

**柳澤** 串本小学校が竣工する2年後を楽しみに待ちたいと思います。

それでは次に進ませていただきます。学校を設計していくには設計のプロセスとか或いは出来上がった学校を設計面でフォローして、それをまた設計にフィードバックするとかいった一連の作業がとても必要だろうと思いますが、総合企画設計ではその辺のシステムをどのように運んでいращやるのでしょうか。

**澤本** 先ほど申し上げたように、学校の建物づくりは将来どんな学校にしていきたいかを皆で語り合い確認し合う良い機会だと思います。ですから、できるだけ多くの関係者が集まって議論していきたいと思っています。

弊社では毎年学校建築の研修会をやっていますが、その第1回の時に長澤悟先生が、学校づくりのスタートは3つの「ら」からと話されました。それは、それ

長澤 悟 先生  
東京大学名誉教授  
教育環境研究所所長  
文部科学省学校施設  
文部科学省学校施設の在り方に関する調査研究協力者会議議長  
国土建設で前進する共生社会研究センター（WASS）センター長

### 総合企画設計へのメッセージ

建築は人の行動や意識を変える力を持つ。  
建築家は社会の変革者である。  
建築を武器として、学校を変え、社会を変える役割を持つ。  
学校を繰り返し設計する総合企画設計にはそれができる。  
志をもってそれを果たす責任がある。

2018年5月

長澤悟先生のメッセージ

それぞれの学校が持っている「たから」を大切に、前の校舎にあったであろう悪かったところ「あら」を無くす、そして関係者で新しい学校像を描いて「みらい」の学校を実現する、ということでした。このお話は非常にわかりやすいし実践しやすいので、関係者がこの3つの「ら」について共通認識を持てばきっと良い学校が出来て行くと思います。

### 設計業界の課題など

**柳澤** 設計業界の現状についてですが、設計という作業を通して問題とか課題をどのように捉えていращいますか。

**澤本** AIの時代でAIが人に代わっていくのではないと言われていたりしていますが、真に創造的なものはやはり人間の頭の中から生まれると思っています。ですから発想豊かな人材をどれだけ集めて育てられるかがその事務所の優劣を決める目目だと思っています。どうやって人材を集めて育てるかは何処の会社も手探りだと思います。

**柳澤** 話は逸れますが、澤本さんは以前文部科学省で設計の仕事を受注する立場にいらっしたことありますが、現在は仕事を受注する立場ですよ。その両方を経験されてギャップみたいなものを感じませんか。

**澤本** そうですね、発注者は目的を持って仕事を発注し、我々設計者はそれを実現する役割がある訳ですが、両方で目的を共有できた時うまくいくように思います。言い換えれば、発注者の意図を的確に把握して、共通理解の上に目的達成の方法を再構築して設計に反映していくことが大事ですね。これは両方の立場を経

験したことが生きています。弊社には文部科学省のOBも多くいて、彼らは発注者の立場も良く分かっているので、設計担当者として両方の通訳をしてくれています。やはりお互いの立場を理解してこそコミュニケーションが生まれるのだと思います。

### 社員に望むことと今後の抱負

**柳澤** 最後に、社員の皆さんに望むことと今後の抱負について伺います。

**澤本** 社員には、理想と志を持って仕事をしてほしいと思います。先ほどトイレ改修の話をしました。誰でも大きな新築物件を設計したいと思うでしょうが、トイレから学校を変えるのだという志を持って設計をする社員が増えるといいなと思っています。

それから会社としては学校建築を通じて日本の教育や人づくりに貢献したいと思っています。冒頭でも言いましたように、教育が変われば学校施設も変わって行かなければならないと長く言われながら、なかなか変わらない現実があります。名建築を一つつくったからと言って、それで日本の学校建築が大きく変わるということはありませんが、ちょっとでも前より良いものをつくり続けることができれば学校建築は変わっていくと思います。ですから学校の設計を沢山手掛けている総合企画設計は、ひょっとしたら日本の学校施設を変えていく可能性があるのではないかと考えています。そうなりたいと思っています。

**柳澤** 今日は長時間にわたり含蓄のあるお話を伺えて大変勉強になりました。ありがとうございました。

**澤本清史氏**  
1954年4月14日生  
1975年 国立石川工業高等専門学校 建築学科卒業  
1978年 岡崎国立共同研究機構  
1983年 文部省 計画課、施設助成課、金沢大学、筑波大学などを歴任  
2010年 株式会社総合企画設計  
2012年 取締役本社担当本部長  
2015年 専務取締役  
2023年10月より現職